

このたび三塔モニュメントが無事に完成し、皆様にお披露目できたことを本当に嬉しく思っています。

まずは、創作の機会をいただいた関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

また、公共的な場所にグラスアートを設置するということで、設計・施工・製作とすべてにおいて、とてもハードルが高く、多くの方たちのお知恵をお借りしなければ実現しませんでした。安全で尚且つ美しく繊細に仕上げることに全力をあげて取り組んでいただきましたことに心から感謝いたしております。

今回のプロジェクトに関わってくださったすべてのみなさま、ほんとうにありがとうございました。

私は横浜に生まれ育ち、横浜を拠点に20数年、建築に関わるアーキテクチュア・グラスアートを製作して参りました。

“アーキテクチュア・グラスアート”・・・あまり聞きなれないかと思いますが、吹きガラスのような工芸寄りのものではなく、かなり大きな空間で建築インテリアに関わるパーテーションや壁画のような作品を手がけています。

日本においてアーキテクチュア・グラスアートはあまり認知されず、アーティストが育たないのは、日本が地震大国だからという理由が大きいと思います。硝子素材の持つマイナス面を考慮にいれ、安全性を保つ作品を制作することは非常に困難だからです。

思えばこのプロジェクトのコンペティションが行われたのも、3.11東日本大震災後の、日本中がどんよりと暗く静まり返っていた頃でした。

誰もが、何をすればよいのか、どうすればよいのかと途方に暮れ、私もいったい自分に何が出来るのだろうか・・・?と問い続けなければなりませんでした。

・・・深く考えているうちに、私は思いました。

『私に出来る事といえば、ガラスで美しいものをつくること。

美しいものは人の気持ちを明るくし、安らぎを与える・・・』

それにしても、割れる、鋭い、危ないというネガティブな印象を持たれることの多いガラスの作品は受け入れてもらえるのだろうか、この仕事を創めた時からずっと地震と向き合ってきたけれど・・・とても悩みました。

阪神淡路大震災から3年後ぐらいに、神戸市の依頼で、震災復興モニュメントを製作したことがありました。

火災ですべてが焼き尽くされ新長田の町で、唯一残ったというビルの中央に震

災復興のモニュメントを作る・・・

被害の大半が火災によるものとは言え、ガラス素材に対する懸念があるのではと心配していました。

しかし、求められたのは『美しいもの、心がパッと明るくなるもの』でした。

今や日本中、ガラスを使わない建築物はどこにもありません。

それだけ技術的にも、ガラスに対する安全性が認められています。

このプロジェクトにおいても、関わった多くの方たちが

『どこみても建物はガラスだらけなんだから大丈夫！』

その言葉に、暗く重たい私の心はどれだけ励まされたかわかりません。

ネガティブないくつもの要因に囚われることなく、私の提案を受けいれてくださった皆様にころから本当に感謝しております。

私は横浜に生まれ育ったと申し上げました。

これまで日本各地に作品を納め、今ではアジアへと拡大していますが、一度としてこの横浜を離れたと思ったことはありませんでした。

横浜が大好きでハマッコであることを誇りに思っています。

今回のこの横浜のプロジェクトのお話をいただいた時、これは何よりも優先すべき私の使命のように思えました。

しかし、もう一つ思い悩んでいたことがありました。

『大階段の上の陶板と喧嘩するようなものは作りたくない』

学生の頃から通学路として横浜駅を行き来していた私にとって、あの陶板に思い出があります。

横浜とは名ばかりで横浜らしさがなく、いつも工事ばかりで天井が低くて暗い印象の横浜駅。

唯一、『横浜開港』の風景を思い浮べることのできるのが、あの陶板でした。

横浜に住んでいるというと羨ましがられますが、それは横浜の歴史が残る馬車道・関内・元町・山手のエキゾチックでハイカラなイメージを想像されるからでしょう。

しかし、実際の横浜と名の付く横浜駅周辺はちっともエキゾチックでもロマンチックでもないのです。

もっと横浜らしさが象徴されるべきなのに・・・

どうしたら、あの陶板と喧嘩せずに、コラボレーションして横浜らしさを演出できるのだろうか？

それからというもの、何度も何度もあの大階段に足を運び、陶板を眺めては思い悩みました。

そうしているうちに、運命のように立ち上がったのが・・・横浜三塔。

開港記念会館 JACK

横浜税関 QUEEN

神奈川県庁 KING

海外の船乗り達が、横浜を目指して、ようやく港について初めて目にした建物があの三塔。

いつしか、JACK・QUEEN・KING という愛称で呼ばれるようになったと伝えられています。

ようするに、三塔は海外からのお客様を日本が初めてお迎えする玄関であり、門のような存在だったわけです。

そう、ポルタの意味も玄関・門・・・です。

横浜にいらっしゃるお客様をお迎えする門のモチーフとしてまさしくピッタリ！でした。

横浜の港をバックに建つ三塔のゲートが浮かび上がりました。

その『ポルタ横浜三塔物語』の説明に入らせていただきます。

\* 横浜市開港記念会館 通称 JACK の塔と呼ばれています。

かつて、外国人居留地と日本人町の接点にあって

横浜のひとびとが過ごしてきた時間、

暮らしに積み重ねられたさまざまな履歴の場면을

“歴史の生き証人”のように見続けてきた建物です。

そして、今も変わらず市民活動の拠点として利用されています。

開港記念会館は時計台が象徴しているように

横浜の“過去・現在・未来”を自由に行き来出来る『横浜の時間』そのもののような建物です。

“時のコラージュ”と名づけました。

横浜の人々の暮らしの中に流れ続ける時間を、

永遠に留まる事のない砂時計と  
文字板に針がいくつもあって何処を指しているかわからない時計で表現してみました。

そして、レンガ壁から覗き見えるのは・・・  
横浜市民が愛する市の花“バラ”です。  
キラキラ光る朝露にぬれて、香しい薫りを放っています。

次に・・・

\* 横浜税関 通称 QUEEN の塔と呼ばれています。  
このイスラム建築の意匠を持った建物は、  
海を正面にして建っています。  
まるで、行き交う船の運航を見守る“女神”のようです。  
明治期前半、日本はシルク貿易で すさまじい発展と躍進を遂げました。  
美しさだけでなく、『日本の夢を世界に力強く切り開いた』建物と言えます。  
(設計者・吉武東里氏 国会議事堂設計者)

“夢の往還”と名づけました。  
アラベスク模様の飾り窓から、星型の王冠をかぶり、  
薄絹を纏った女神が海に向かってたたずんでいるイメージです。

女神の衣の中央をすべるように 昇っていく“花をくわえた鳥”が一羽・・・  
正倉院の宝物にも見かける幸せを呼ぶという『花喰い鳥』です。  
日本の国花“さくら”の枝を啜えています。  
そして、衣の裾にも 桜の花びらが散りばめました。

次に・・・

\* 神奈川県庁 通称 KING  
威風堂々としたこの建物は、大正末期 当時の旧県庁舎が関東大震災で消失し、  
昭和初期流行した“帝冠様式”を取り入れて再建されました。  
横浜市を中心として県政をつかさどり、人々の暮らしの機軸となる、まるで“砦  
のような存在感”から、“明けの砦”名づけました。

JACK が横浜の時間をめぐり、人々の暮らしの中から  
そして、QUEEN が海へと広げた夢の空間から、

時空を越えて、見聞きし、受感して拾い集めてきた、心地よいもの、美しいもの、役に立つもの、ハイセンスなもの、めざましいもの、が、キングの倉なかに宝物のように収められています。

それらこそが、数多くの横浜発祥となったものたちです。

ポルタを訪れるたびに『あれ？これは？』と発見できる楽しみがあると素敵だなあと四角いレリーフに横浜発祥の物事をデザインして挟み込んでみました。

中央には、県の花“やまゆり”が天から降り注ぐ恵みの雨を受けて大輪の花を咲かせています。

そして、平和を願う鳩たちが天空を飛び交います。

ポルタ横浜三塔の説明はこれで終わりなのですが、最後に・・・

震災後、日本中誰もが様々に考えさせられる事が多かったと思います。

テレビ報道で流れる、被災地で故郷を離れずに必死に復興に励んでいる方たちのインタビューを耳にして、私は反対に励まされました。

すべてが流されても、人の心は流されない。

自分の町を、村を、愛して止まない気持ちは流されない。

私たちも横浜を、自分の故郷を愛する気持ちは変わりません。

その気持ちは、どんなことがあっても負けない強い町にする。

自分らの町に強く愛着を持ち、活性化させることが日本の強さになる。

今回、微力ながら、多くの方に愛される町づくりに関わる事が出来たことを、心から感謝している次第です。

本当にありがとうございました。